ある時からセックスが全ての世界で生きていた。

窓からは宝石のような夜景が一望できるのに、部屋の中は暗く淀んでいる。

とても同じ世界とは思えない。ガラス一枚隔てているだけで、まるで別次元。こっち側の世界は醜く腐って、膿んでいる。

夜になれば尚のこと。暗い笑みを浮かべた父が部屋にやってきて、逃げられないように頑丈な鍵をかける。

そんなことしなくても逃げないのに。

「おいで、詩優」

「……また、エッチするの？」

父さんは頷いて、ゆっくり俺に手を伸ばす。そして衣服を全て剥ぎ取った。学校から帰るといつもこうなる。母さんが仕事から帰ってくるまで、俺は父さんと“エッチ”しないといけなかった。

脚をめいっぱいに開いて、父さんにお尻の穴が見えるようにする。これから、ここにお父さんの性器を受け入れる。

「あっ……詩優、中にどんどん入っていくよ。ほら、わかるか？」

身体の中をナイフで抉られるようだ。その痛みは違和感に、違和感は不快感に変わる。腰の動きが速くなったとき、慌てて首を振った。

「お父さん、熱いの出さないでっ」

「どうして？」

「だって、赤ちゃんできちゃうんでしょ？」

父からそう教わっていた。男の人が出す精液をここに入れると、赤ちゃんができてしまうらしい。

「僕、まだ子ども産めないよ。怖いもん」

「本当に可愛いな、詩優は……大丈夫、もし赤ちゃんができたら皆で暮らそう」

そんなの、母さんが許さないと思うけど……。

毎回そんなふざけたやり取りをして、父は俺の中に射精した。

馬鹿な俺は子どもができてしまうと本気で信じていた。父が全ての世界で生きていた、小学三年生のときだ。

高校生になった今、その記憶は鍵付きの箱に仕舞っている。

（ あ。今日もいる ）

いつもの通学路、いつも突っ切って通る公園。

そこに必ずひとりの少年が現れるようになった。

何をするでもなく独りでベンチに座っている。

制服を着てるのに、俺が遅刻ギリギリで走ってる時もボーッと座っている。気付けば、彼のことが気になって仕方がなくなった。

『詩優、悪いんだけど、今日の夜は外に出てくれる？ 人が家に来るから……』

朝、学校に出掛ける直前。不意に告げられた母の言葉に愕然とした。

また、簡単に好きになった男を家に連れ込む気だ。でも素直に頷き、鞄を持って家を出た。

どこでヒマ潰そう。

高校三年生のはため息を飲み込む。

小学五年生のときに親が離婚してから、母と二人で暮らしている。

しかし最近困ったことがある。再婚を望む母が、手当り次第(と言ったら殺されるけど)男を捕まえては家に連れて来るのだ。最初こそ怒りもしたし嫌悪感も覚えたけど、段々言い争うのも面倒になって詩優の方から折れることが多くなった。

家にいたくなければ、外に出てればいい。幸い母は時間を潰すための金をくれる。もっとも、その金も去っていく男達から貰った汚い金なのかもしれないけど。

カラオケかネカフェか、いっそ久しぶりに服でも買いに行こうか。そう考えて大きな公園に入った。

学校へ行くための通り道だが、木々が生い茂って、朝でも鬱蒼としてる。夜は不気味だからあまり訪れない公園だ。

でも中央のベンチに、いつもの少年が座っている。学校行く気あるか？ と訊きたいほど寛いで脚を伸ばしている。

ひとまずその少年の前を横切り、代わり映えしない学校へ向かって一日を過ごした。

やっと終わった。本当は誰か誘って時間を潰せたら良かったが、今日に限って誰も捕まらなかった。帰宅部だとこういう時に困る。真っ先に家に帰れる子と、家に帰れない子。この差は何なのか。

親は普通、子が家に帰ってくるのを待ってる。

じゃあ子に「帰ってくるな」と言う親は何なんだ？

母は生活保護を受けてる。だから高校を卒業したら一人暮らしするつもりだ。

早くその時が来るといい。……けど、一年後のことより今この瞬間に困ってる。

本当、これからどこに行こう。

考えてるうちに脚は動いていつもの公園まで戻って来てしまった。暗くて薄気味悪い。それなのに何となく、ベンチに座ってしまった。

いつも見知らぬ少年が座ってる定位置に。

あぁ。……確かに良いかも。

座って初めて気付いたことは、この場所は見晴らしがいい。前方なら見えない所などなかった。

意外に居心地がよくて、猛烈な睡魔に襲われた。顔を上げようとしてもすぐにガクンと下に落ちる。それを数回繰り返して、……気付いた時には闇の中だった。

鳥の声が聞こえる。頬に当たる風も冷たい。

いや。……風、か？

リアルに何かが頬に触れてる気がする。もしかして虫だろうか。

それは嫌だと思って飛び起きた。

「あ。起きた？」

「えっ」

詩優は先ほどののベンチで目を覚ました。ところが、今は驚いて声が出ない。眠ってしまう前と二点ほど景色が違ったからだ。

まず、空が暗くなっている。公園の中は電灯も点いていた。

そして二つ目。独りだった自分の前に、一人の少年がいる。隣に座って、息が当たりそうなほど顔を近付けていた。

彼は、いつもこのベンチで見かけていた少年だ。

「こんなとこで寝てたら危ないよ。今は物騒なんだから」

黒髪の綺麗な、笑顔の可愛いらしい少年。彼に話しかけられたことに、少しだけ高揚してる自分がいた。

「ここは夜は特に危ないから、早く帰りな」

「え……あのー、君は？」

「俺はまだ、ここにいるよ。待ってる人がいるから」

そう言って彼は隣に深く腰掛ける。

「どうしたの、家に帰らないの？」

動かない俺を不思議に思って、彼は首を傾げた。

「ちょっと、家には帰れなくて」

「あれ、家出少年？」

「逆。……帰ってくるなって感じなんだよ」

つい、そんな踏み切ったことを言ってしまった。少年の表情が変わる。そしてまた距離を詰めて、俺に囁いた。

「行く所がないの？」

普段なら絶対有り得ない距離。パーソナルスペースなんてまるで考えてない接近の仕方にドキッとした。あと、まつ毛ながっ。

「行くところは……ない、かな。少なくともあと数時間は」

「ふーん。俺で良かったらどこか付き合おうか」

「えぇっ？」

本気かよ、と身を引く。

だって今会ったばっかの人間だ。何でそんな事を言ってくるのか分からない。

でもすぐに返事しなかったせいか、彼はおかしそうに笑って手を振った。

「警戒してんね。正しいよ、例え同い年ぐらいでも信用しちゃ駄目」

「え……わっ！」

彼は、台詞とは反対に俺の手を掴み、強引に立たせた。正面から向き合う形になる。寝起きからワケ分からない状況が続いて困惑した。

「でもここに居るのは良くないんだなー。時間潰すなら別の場所に行こう」

そう言うと彼は俺の手を引き、先を歩き出した。それが結構早足で、ほとんど引き摺られるような形になる。

「おいおい！ どこ行くんだよ！」

確かに、歳も身長も自分と変わらない少年。それでも不安に駆られた。彼は薄く笑ってるだけで真意が掴めない。

一見無害そうだけど、実はめちゃくちゃ危険思考の持ち主だったらどうしよう、なんて考えが頭に浮かぶ。でも振り返った彼は迷子のように首を傾げた。

「行き先？ ……考えてない。君は、どこ行きたい？」